

# 傳達摩撰『般若波羅蜜多心經頌』の譯注研究

程 正

## 一 傳達摩撰『般若波羅蜜多心經頌』について

傳達摩撰『般若波羅蜜多心經頌』(以下、『心經頌』)は、初期禪宗の僧による『心經』注疏の中で、最も謎の多いものである。撰者名がはっきり記されている他の注疏と比べると、『心經頌』は、その撰者を初祖達摩大師としているものの、本文に使う『心經』が玄奘譯のものであることからすれば、その成立は明らかに玄奘以後のものとなり、何者かによって達摩に假託して作成されたものである。このように達摩に假託し、意圖的に自分を隠そうとした眞の撰者を割り出すことは、不可能に近いと言わざるをえない。撰者どころか、その撰者がどの禪宗宗派に所屬していたのか、といったことでもさえないままである。ただこの『心經頌』の本文には、法相唯識の思想の影響がかなりあったということは認められよう。

また従来、傳世資料としての『心經頌』は、獨立したものでなく、初祖達摩に歸せられた六種の禪門資料をまとめた

『少室六門』<sup>(1)</sup>という禪宗文獻集の第一門として傳承されてきたのである。その六種の禪門資料とは、第一門の『心經頌』、第二門の『破相論』、第三門の『二種入』、第四門の『安心法門』、第五門の『悟性論』、第六門の『血脈論』の六種のことである。さらに、前記のうち、第二門の『破相論』、第五門の『悟性論』、第六門の『血脈論』の三種を一括して、別に『達摩大師血脈論』または『少林三論』、『達摩三論』などと呼ばれるものがある。このほかに、一九六八年に韓國で刊行された『新刊懸吐禪門撮要』(二卷)<sup>(2)</sup>に『心經頌』が獨立したかたちで収録されているが、その底本がまったく不明であることから、その取り扱いには、十分な注意が必要とされる<sup>(3)</sup>。

ところが、つい最近、椎名宏雄氏が、俄(ロシア)藏黒水城(カラホト)文獻の中から、獨立した『心經頌』の西夏版刊本二種を發見し、その研究成果を「カラホト出土の達摩大

師『夾頌心經』<sup>(5)</sup>と題して發表された。これらの西夏版の刊本二種について、椎名氏は次のように紹介されている。

西夏版の二種は、TK一五八號(八號)と同一五九號(九號)。兩者とも折本で毎面五行×一五字の精刻本。本來の全二二折四面中、八號は首部から本文第二頌までを缺く前缺本で、一九折三八面を現存。九號は反對に本文第三五頌以下を缺く尾缺本で、首部から第一八折半、第三七面までを現存。したがって、兩者を合すると、若干の剥落や磨滅の文字を除き、ほぼ全文が判明する。<sup>(6)</sup>

さらに椎名氏は、これらの二種は版式・行格・本文内容は同一ながら、刻字體を異にする異版であると指摘される。また、九號に見られる「敬」字の缺筆現象が宋版特有のものであり、九號は遼國を經由せずにストレートに宋からもたらされた版本の西夏覆刻本であり、八號はその模刻であると推論される。<sup>(7)</sup>最終的に椎名氏は、これらの「兩者の祖本はとも北宋版と推定され、北宋期には『夾頌心經』として本書の流通していたことが判明する」と結論づけられたのである。

椎名宏雄氏の研究成果によつて、『心經頌』がすくなくとも北宋、西夏の時代に『少室六門』とは別に獨立したものとして流通していたことが裏付けられたのである。宋代に獨立した『心經頌』が流通していたことは、同文獻の研究において極めて重要な意味をもつものであろう。

次に『心經頌』のテキストに觸れておきたい。なお、從來獨立した『心經頌』の存在が知られなかつたために、専ら『少室六門』に含まれるテキストを取り上げることになる。

伊吹敦氏は、『少室六門』と『達磨三論』の研究に大きな足跡を残した椎名宏雄氏の研究成果を踏まえつつ、現存する『少室六門』のテキストを、刊本七種と寫本二種に分類して紹介されている。すなわち、

a 有刊記本

- 1 正保四年(一六四七)、江戸左太郎刊一冊本(駒澤大學圖書館<sup>121.2</sup> 7 長 寺舊藏本、早稻田大學圖書館 文庫7 595 正福寺舊藏本)
- 2 寛文七年(一六六七)、刊一冊本(駒澤大學圖書館<sup>121.2</sup> 1)
- 3 延寶三年(一六七五)、秋田屋五郎兵衛刊三冊龍頭本(國立國會圖書館<sup>821</sup> 145 圓光寺舊藏本、一冊に改装、駒澤大學圖書館<sup>121.2</sup> 3)

b 無刊記本

- 1 刊年不明一冊本(駒澤大學圖書館<sup>121.2</sup> 8 長徳寺舊藏本 叡山文庫 天海藏<sup>31</sup> 11、叡山文庫 眞如藏<sup>24</sup> 22、叡山文庫藥樹院藏<sup>6</sup> 120、叡山文庫 金臺院藏<sup>6</sup> 79)
- 2 大正藏所收、宗教大學藏、刊年不明刊本

- 3 刊年不明一冊刊本（駒澤大學圖書館 忽 107）
  - 4 刊年不明一冊刊本（駒澤大學圖書館 121.2 2）
- 一方、寫本では、次の二本が知られている。

- 1 内閣文庫所藏、書寫年不明一冊寫本（林羅山舊藏本）

- 2 河村孝道氏所藏、書寫年不明一冊寫本（安養寺舊藏本）

の九種である。それぞれのテキストの詳細については、氏の論文に詳述されており、ここで贅言する必要はあるまい。

そこでこのリストに、先述した椎名宏雄氏によって新たに発見された西夏版刊本二種を付け加えることが可能となった。この二種は、いずれも獨立したテキストであり、伊吹氏の前記分類に習って追加すれば、次のようになる。

- a 有刊記本
  - 4 天賜禮盛國慶五年（一〇七三）、陸文政施印一冊本（前缺本）（俄藏黑水城文獻 TK158）
- b 無刊記本
  - 5 刊年不明一冊本（尾缺本）（俄藏黑水城文獻、TK159）

さらに、かつて筆者が言及したように<sup>(1)</sup>、長野市にある大安寺（曹洞宗）に所藏する資料に『般若心經頌鈔』と呼ばれる寫本一種が含まれていることは、『曹洞宗報』（平成一六年

傳達摩撰『般若波羅蜜多心經頌』の譯注研究（程）

八月號）に掲載される「曹洞宗文化財調査委員會調査目録及び解題」（二四五）（以下、「解題」）によって明らかにされた。永井政之氏の執筆になるこの「解題」には、

般若心經頌鈔 二卷一冊  
延寶三年（一六七五）書寫。

達磨の撰述とされる『心經頌』（『少室六門』所收）を拈提したもの。末尾に「延寶三乙卯年七月吉祥日。於長泉下東北窗下書寫之者也」とある。ついで南陽慧忠（七五寂）による「忠國師心經之註解」を収録する。卷末に「籌惟量之」とある。大安寺一七世籌惟玄勝（一七〇九寂）代に備えたものであろう。

とある。實際に撮影したマクロフィルムの紙焼きを拜見したところ、『般若心經頌鈔』が分量的には全體の五分の四を占め、その次に附せられている『慧忠注』が約五分の一である。この延寶三年（一六七五）七月に書寫された『般若心經頌鈔』の内容が、單なる『心經頌』本文ではなく、その本文にさらに注釋を付け加えたものではあるが、『心經頌』のすべての本文が含まれていることからして、テキストの研究には十分値するものであると考えられる。しかし残念なことに、大安寺本の傳入経緯や底本となるテキストなどについては、全く判っていない。その一方、大安寺本『般若心經頌鈔』の出現によって、日本においても『少室六門』とは別に、『心經頌』

が唐代の禪僧である慧忠の『慧忠注』と一緒に研究され、流傳していたことは認められよう。しかも『般若心經頌鈔』の構成からすれば、『慧忠注』がオブションのような存在で、『心經頌』が獨立したかたちで傳承されていた可能性も十分に考えられよう。

以上、目下知られている『心經頌』のテキストは、有刊記本の四種、無刊記本の五種、それに寫本の三種で、都合一二種である。なお、テキストの校訂については、椎名宏雄氏が六地藏寺所藏の五山版『少室六門』を底本とし、新たに發見された西夏版TK一五八號(一〇七三年刊)、TK一五九號を校本に用いて校訂したテキスト<sup>(13)</sup>が、現在のところ最もよいといえよう。

最後に、『心經頌』の研究成果について簡単にまとめておこう。

先述したように、『心經頌』を『少室六門』の一門として、その成立やテキストの變遷などについて畫期的な研究成果をだされたのは、椎名宏雄、伊吹敦の兩氏である。すなわち、椎名宏雄氏は『少室六門』と『達摩大師三論』と題した論文の中で、『少室六門』の最も古いテキストは六地藏寺所藏の五山版で、この五山版が日本の中世初期に刊行された精刻の覆宋版と見られることから、『少室六門』が宋代の編集と認めるべき<sup>(13)</sup>ことを主張された。椎名氏のこの説は、從來の

『少室六門』の日本編集説<sup>(14)</sup>を真つ向から否定する斬新なものである。これに對して、伊吹敦氏は『達摩大師三論』と『少室六門』の成立と流布<sup>(15)</sup>と題した論文の中で、『少室六門』がやはり「日本における編集」であり、その第一門の『心經頌』のソースとなるものが、恐らく祖本(高麗本、或いは宋本)に基づくものであろう<sup>(16)</sup>と主張される。しかしながら、兩氏の研究は、『心經頌』に限定したのではなく、あくまでも『少室六門』を研究対象としており、いずれも文獻學の立場から検討を加えたものである。

その一方、かつて柳田聖山氏は次のように指摘された。

(前略)ダルマ關係の文書を集めた『少室六門』の第一門にも『心經頌』一卷を収めている。近代の研究者は、此の書に對してすこぶる冷淡であるが、その内容はやはり初期禪宗における『般若心經』の理解を示すものとみてよい<sup>(17)</sup>。

まことに柳田氏の指摘された通り、『心經頌』の思想的研究については、從來ほとんどなされていなかったといわざるを得ないのである。今回、こうした状況を打開する第一歩として、筆者は次項で『心經頌』のテキストの譯注を試みることにし、その思想的研究は今後の課題としたい。

- (1) 『大正藏』卷四八、『卍續藏』第一二三冊、『新纂大日本續藏經』第六四卷にそれぞれ収録されている。川瀬一馬氏の研究によれば、『少室六門』は、宋代にまとめられたもので、鎌倉末期に宋版を覆刻した五山版があるという。(川瀬一馬『五山版の研究』上巻、(株)共立社印刷所、八四頁、下巻、佐藤製版(株)、三九七頁)。
- (2) 一九六八年、韓國曹溪宗の日用教科書として、鏡虚惺牛・雪峰鶴夢によつて新たに編纂されたものである。金井山梵魚寺刊『禪門撮要』を活版に移した新刊。全編、新たに諺文による訓點を施し、過去七佛より西天東土の三十三祖を経て、太古普愚、佛日普照、鏡虚惺牛に至る列祖の圖像と略傳、および五家家風の一章を首尾に置き、さらに『禪門撮要』の本文以外に、『心經頌』、『悟性論』、『信心銘』、『永嘉大師證道歌』の四篇を加えている。
- (3) 最初に紹介されたのは、椎名宏雄氏『少室六門』と『達磨大師三論』、『駒澤大學佛教學部論集』第九號、一九七八年である。
- (4) 伊吹敦『達磨大師三論』と『少室六門』の成立と流布、『アジアの文化と思想』第三號、一九九四年、一七頁。
- (5) 『宗學研究』(第四六號、二〇〇四年)、一三五―二四〇頁。
- (6) 椎名宏雄前掲論文、一三五頁。
- (7) 椎名宏雄前掲論文、一三五頁。
- (8) 椎名宏雄前掲論文、一三六頁。
- (9) 伊吹敦前掲論文、七六頁。
- (10) TK一五九號が尾缺本であるために、本来このテキストに刊

傳達摩撰『般若波羅蜜多心經頌』の譯注研究(程)

- 記あったかどうかは不明である。今は便宜上、無刊記本に入れることにした。
- (11) 拙論『般若心經慧忠注』の諸本、新出の黒水城本を中心として、『東アジア佛教研究』第三號、二〇〇五年、六四頁。
- (12) 椎名宏雄前掲論文、一三六―一三八頁。
- (13) 椎名宏雄氏は、氏の『宋元版禪籍の研究』(大東出版社、一九九三年)の中に、その主張を貫かれている。(同書、三五六頁などを参照)。
- (14) 禿氏祐祥『少室六門集に就て』、『龍谷學報』第三〇九號、一九三四年)を参照。また柳田聖山氏も、具體的に論じてはいないものの、その編集は、恐らくわが國でのことと思われる」という見方を示されている。柳田聖山『北宗禪の一資料』、『印度學佛教學研究』第一九卷第二號、一九七一年)のちに『禪佛教の研究』、柳田聖山集 第一卷(法藏館、一九九九年)に再録された。同書、二九三頁を参照されたい。
- (15) 伊吹敦前掲論文、九〇頁。
- (16) 伊吹敦前掲論文、四二頁。
- (17) 柳田聖山前掲書、二九三頁。

二 傳菩提達摩撰『般若波羅蜜多心經頌』の譯注

凡例

- \* 『新纂大日本續藏經』第六四卷に所收『少室六門』の第一門のテキストを用いる。
- \* 椎名宏雄氏校訂本を參考する。必要に應じて校記をつける。

小室六門

第一門 心經頌

摩訶般若波羅蜜多心經

智慧清淨海、理密義幽深。  
 波羅到彼岸、<sup>(1)</sup> 向道祇由心。  
 多聞千種意、不離緣因針。  
 經花糸一道、萬劫衆賢欽。

觀自在菩薩、

菩薩超聖智、<sup>(2)</sup> 六處悉皆同。  
<sup>(3)</sup> 心空觀自在、無闕大神通。  
 禪門入正受、三昧任西東。  
 十方遊歷遍、不見佛行蹤。

行深般若波羅蜜多時、

<sup>(3)</sup> 六年求大道、行深不離身。

小室六門

第一門 心經頌

摩訶般若波羅蜜多心經

智慧は清淨なる海、理は密にして義は幽深なり。  
 波羅は彼岸に到る、道に向かうは祇だ心に由るのみなり。  
 多聞せば千種の意なるも、線を離れざるは針に因るなり。  
 花糸の一道を経ば、萬劫にも衆賢は欽う。

觀自在菩薩、

菩薩は聖智を超え、六處に悉く皆な同ぜり。  
 心、空なるは觀自在、無闕にして大神通なり。  
 禪門より正受に入らば、三昧は西東に任す。  
 十方に遊歷すること遍きも、佛の行蹤を見ず。

行深般若波羅蜜多時、

六年、大道を求むるも、行は深くして身を離れず。

智慧心解脱。 達彼岸頭人。  
聖道空寂寂。 如是我今聞。  
佛行平等意。 時到自超群。

照見五蘊皆空、

貪愛成五蘊。 假合得為身。  
血肉連筋骨。 皮裏一堆塵。  
迷徒生樂著。 智者不為親。  
四相皆歸盡。 呼甚乃為真。

度一切苦厄。

妄繫身為苦。 人我心自迷。  
涅槃清淨道。 誰肯著心依。  
陰界六塵起。 厄難業相隨。  
若要心無苦。 聞早悟菩提。

舍利子、

達道由心本。 心淨利還多。  
如蓮華出水。 頓覺道源和。  
常居寂滅相。 智慧衆難過。  
獨超三界外。 更不戀娑婆。

智慧もて心の解脱せば、彼岸の頭に達せし人なり。  
聖道は空にして寂寂なるを、是の如く我れ今聞けり。  
佛は平等なる意を行せば、時の到りて自ずから群を超えん。

照見五蘊皆空、

貪愛もて五蘊を成じ、假に合して身と爲すを得たり。  
血肉は筋骨に連なるも、皮の裏は一堆の塵なり。  
迷徒は樂著を生ずるも、智者は親しきと爲さず。  
四相は皆な盡に歸す、甚を呼びてか乃ち真と爲さん。

度一切苦厄。

妄もて身を繫とるを苦と爲し、人我の心もて自ら迷う。  
涅槃は清淨なる道なれば、誰が著心もて依ることを肯がわんや。  
陰界に六塵の起り、厄難の業も相い隨う。  
若し心の苦無きを要せば、聞きて早く菩提を悟らん。

舍利子、

道に達するは心の本に由り、心の淨なれば、利も還た多し。  
蓮華の水より出づるが如く、頓すみやかに道源の和なるを覺る。  
常に寂滅の相に居らば、智慧もて衆もろの難を過ぐ。  
獨り三界の外に超えて、更に娑婆を恋せず。

色不異空、空不異色。

色與空一種 未だ見兩般

二乘生分別 執相自心護

空外無別色 非色義能真

無生清淨性<sup>8</sup> 悟者即涅槃

色即是空、空即是色。

非空空不有 非色色無形

色空同歸一 淨土得安寧

非空空爲妙 非色色分明

色空皆非相 甚處立身形

受想行識、亦復如是。

受想納諸緣 行識量能真

遍計心須滅 我病不相干

解脫心無礙 破執悟心源

故云亦如是 性相一般般

舍利子、

說舍論身相 利言一種心

菩薩金剛力 四相勿令侵

達道離人執 見性法無音

色不異空、空不異色。

色と空とは一種なるも、未だ知らざれば、兩般と見る。

二乘は分別を生じ、相に執して自ら心を護む。

空の外に別に色無くば、色に非ざるの義は能く真む。

無生は清淨なる性なれば、悟る者は即ち涅槃なり。

色即是空、空即是色。

空に非ざれば空は有らず。色に非ざれば色に形無し。

色と空は同一に歸すれば、淨土にして安寧を得。

空に非ざれば空は妙となり、色に非ざれば色は分明なり。

色と空は皆な相に非ざれば、甚れの處にか身形を立つるや。

受想行識、亦復如是。

受と想は諸もろの縁を納め、行と識は能く真むるを量る。

遍計なる心は須く滅すべし。我の病い相い干かず。

解脫せば心は無礙にして、執を破せば心源を悟る。

故に云う、「亦如是」と。性と相は一般般なり。

舍利子、

「舍」と説くは身相を論じ、「利」とは一種の心を言う。

菩薩は金剛力にして、四相に侵さしむこと勿し。

道に達せば人執を離れ、見性せば法も無音なり。



諸漏皆總盡、遍體是真金

是諸法空相、

諸佛說空法、  
尋經覓道理、  
何日學心休、  
圓成真實相、  
頓見龍心修、  
迴然超法界、  
自在更何憂、

不生不滅、

廬舍清淨體、  
如空皆總遍、  
不共皆不著、  
和光塵不染、  
無相本來真、  
萬劫體長存、  
無舊亦無新、  
三界獨為尊、

不垢不淨、

眞如越三界、  
能仁起方便、  
空界無有法、  
本來無一物、  
垢淨本來無、  
說細及言麤、  
是現一輪孤、  
豈合兩般呼、

不增不減、

如來體無相、  
滿足十方空、

諸もろの漏皆な總て盡き、遍體是れ眞金なり。

是諸法空相、

諸佛は空なる法を説くも、  
聲聞は有なる相もて求む、  
經を尋ねて道理を覓むれば、  
眞實の相を圓成せば、  
頓ち見て心もて修するを龍心、  
迴然として法界を超え、  
自在して更に何ぞ憂えん、

不生不滅、

廬舍の清淨なる體は、  
空の皆な總て遍きが如く、  
共にせずして皆な著せず、  
光に和して塵に染まらざれば、  
無相にして本來眞なり、  
萬劫にも體は長く存す、  
旧きも無く亦た新しきも無し、  
三界に獨り尊と爲す、

不垢不淨、

眞如は三界を越え、  
能仁は方便を起こして、  
空界には有なる法無くば、  
本來一物も無くば、  
垢淨は本來より無し、  
細を説き及び麤を言つ、  
是れ一輪の孤を現す、  
豈兩般と呼ぶ合けん、

不增不減、

如來の體は無相にして、  
十方の空に満ち足る、

空上難立有。有内不見空。  
看似水中月。聞如耳畔風。  
法身何増減。三界號眞容。

是故空中、

菩提不在外。中間覓也難。  
非相非非相。量測失機關。  
世界非世界。三光照四天。  
本來無障闕。甚處有遮欄。

無色無受想行識、

無色本來空。無受意還同。  
行識無中有。有盡卻歸空。  
執有實不有。依空又落空。  
色空心俱離。方始得神通。

無眼耳鼻舌身意、

六根無自性。隨相與安排。  
色分緣聲響。人我舌談諧。  
鼻或分香臭。身意欲情乖。  
六處貪愛斷。萬劫不輪迴。

空の上に有を立て難く、有の内に空を見ず。  
看ば水中の月に似たり、聞かば耳畔の風の如し。  
法身、何でか増減せば、三界、眞容と號せん。

是故空中、

菩提は外に在らず、中間にも覓め難し。  
相に非ざるも非相に非ず。量測せんとせば機關を失う。  
世界にして世界に非ず、三光もて四天を照らす。  
本來より障闕無くば、甚れの處にか遮欄有らん。

無色無受想行識、

色無きは本來より空にして、受無きは意還た同じ。  
行・識は無の中に有るも、有盡きなば空に却歸る。  
有に執するも實には有ならず。空に依らば又た空に落つ。  
色と空の心俱に離るれば、方始めて神通を得ん。

無眼耳鼻舌身意、

六根に自性無く、相に随わば與に安排す。  
色の分は聲の響に縁り、人と我は舌の談諧なり。  
鼻は或いは香と臭を分かち、身意は欲情もて乖つ。  
六處への貪愛を斷ずれば、萬劫にも輪迴せず。

無色馨香味觸法、

證智無馨色。香味觸他誰。  
六塵從妄起。凡心自惑疑。  
生死休生死。菩提證此時。  
法性空無住。只恐悟他遲。

無眼界乃至無意識界、

六識從妄起。依他性自開。<sup>(23)</sup>  
眼耳兼身意。誰肯自量裁。<sup>(24)</sup>  
舌鼻行顛倒。心王卻道回。<sup>(25)</sup>  
六識中不久。頓悟向如來。<sup>(27)</sup>

無無明亦無無明盡、乃至無老死亦無老死盡。

十二因緣有。生下老相隨。  
有身無明至。二相等頭齊。  
身盡無明盡。受報卻來期。  
智身如幻化。急急悟無爲。

無苦集滅道、

四諦興三界。頓教義分明。<sup>(28)</sup>  
苦斷集已滅。聖道自然成。  
聲聞休妄想。緣覺意安寧。

傳達摩撰『般若波羅蜜多心經頌』の譯注研究(程)

無色馨香味觸法、

證りの智には馨も色も無く、香も味も觸もの他は誰ぞ。<sup>(23)</sup>  
六塵は妄從り起こり、凡心は自から惑疑す。  
生死もて生死を休すれば、菩提の證は此の時なり。  
法性は空にして住すること無きも、只だ他を悟ること遲きを恐るのみ。<sup>(27)</sup>

無眼界乃至無意識界、

六識は妄從り起らば、依他の性は自から開く。<sup>(23)</sup>  
眼と耳兼ねて身と意は、誰か自ら量裁するを肯わんや。<sup>(24)</sup>  
舌と鼻は顛倒を行するも、心王は却りて道回す。<sup>(25)</sup>  
六識の中には久しからず、頓に悟りて如來に向かう。<sup>(27)</sup>

無無明亦無無明盡、乃至無老死亦無老死盡。

十二因緣有らば、生の下に老相い隨う。  
身有らば無明至り、二相は等頭にして齊し。  
身盡くれば無明も盡き、報を受けて來期に却る。<sup>(24)</sup>  
身の幻化するが如くを知らば、急急して無爲を悟らん。

無苦集滅道、

四諦より三界は興こり、頓教の義は分明なり。<sup>(28)</sup>  
苦の斷じ集の已に滅せば、聖道は自然に成る。  
聲聞は妄想を休め、緣覺は意、安寧たり。

欲知成佛處。心上莫留停。

無智亦無得、

法本非無有。智慧難測量。  
歡喜心離垢。發光滿十方。  
難勝於前現。遠行大道場。  
不動超彼岸。善慧法中王。

以無所得故、

寂滅體無得。真空絕手攀。  
本來無相貌。權且立三檀。  
四智開法喻。六度號都關。  
十地三乘法。衆聖測他難。

菩提薩埵。

佛道眞難識。薩埵是凡夫。  
衆生要見性。敬佛莫心孤。  
世間善知識。言論法細<sub>處處</sub>。  
頓悟心平等。中間有相除。

依般若波羅蜜多故、

般若言智慧。波羅無所依。

成佛の處を知らんと欲せば、心の上に留停すること莫かれ。

無智亦無得、

法は本より有ること無きに非ざるも、智慧もて測量し難し。  
歡喜には心、垢を離れ、光を發して十方に滿つ。  
難勝は前に現じ、遠行は大道場なり。  
不動は彼岸を越え、善慧は法の中の王たり。

以無所得故、

寂滅なる體は得ること無く、真空は手もて攀まえることを絶つ。  
本來相貌無きも、權りに且く三檀を立つ。  
四智もて法の喩えを開き、六度を都關と號す。  
十地・三乗の法も、衆聖、他を測ること難し。

菩提薩埵。

佛道は眞に識り難く、薩埵は凡夫なり。  
衆生の見性せんと要せば、佛を敬いても心を孤とすること莫かれ。  
世間の善知識は、言もて法の細・處を論ず。  
頓に心の平等なるを悟らば、中間の有相は除かる。

依般若波羅蜜多故、

「般若」は、智慧を言い、「波羅」は依る所無し。

心空性廣大。内外盡無爲。  
性空無礙辯。三界達人稀。  
大見明大法。皆讚不思議。

心無罣礙。

解脫心罣礙。意若太虛空。  
四維無一物。上下悉皆同。  
來往心自在。人法不相違。  
訪道不見物。任運出煩箒。

無罣礙故、無有恐怖、

生死心恐怖。無爲性自安。  
境忘心亦滅。性海湛然真。  
三身歸淨土。<sup>(33)</sup>八識離因緣。<sup>(34)</sup>  
六通隨實相。<sup>(35)</sup>復本卻還源。

遠離一切顛倒夢想、

二邊純莫立。中道勿心修。  
見性生死盡。菩提無所求。  
身外覓眞佛。<sup>(36)</sup>顛倒一生休。  
靜坐身安樂。無爲果自周。

心は空、性は廣大にして内外盡きて無爲たり。  
性の空にして無礙なる辯は、三界に達せし人稀なり。  
大見もて大法を明め、皆不思議なりと讚す。

心無罣礙。

心の罣礙を解脫せば、意は太虛空の如し。  
四維に一物無き、上下悉く皆な同じ。  
來往するも心は自在にして、人・法は相違わず。  
道を尋めるも物を見ず、任運にして煩箒より出づ。

無罣礙故、無有恐怖、

生死ならば心は恐怖し、無爲ならば性は自ずから安ず。  
境の忘せば心も亦た滅し、性の海も滄然として真し。  
三身の淨土に歸せば、八識も因縁を離る。  
六通は實相に隨い、本に復りて却た源に還える。

遠離一切顛倒夢想、

二邊は純ら立つること莫く、中道は心もて修すること勿かれ。  
見性せば生死も盡き、菩提は求むる所無し。  
身の外に眞佛を覓むるは、顛倒にして一生休す。  
靜坐せば身は安樂にして、無爲の果も自ずから周し。

究竟涅槃。

究竟無生性。清淨是涅槃。  
凡夫莫測聖。未到即應難。  
有學卻無學。佛智轉深玄。  
要會無心理。莫著息心源。

三世諸佛、

過去非言真。未來不為真。  
現在菩提子。無法號玄門。  
三身同歸一。一性遍含身。  
達理非三世。一法得無因。

依般若波羅蜜多故、得阿耨多羅三藐三菩提。

佛智深難測。慧解廣無邊。  
無上心正遍。慈光滿大千。  
寂滅心中巧。建立萬餘般。  
菩薩多方便。普救為人天。

故知般若波羅蜜多、是大神咒、是大明咒、

般若為神咒。能除五蘊疑。  
煩惱皆斷盡。清淨自分離。  
四智波無盡。八識有神威。

究竟涅槃。

「究竟」なる無生の性にして、清淨は是れ「涅槃」なり。  
凡夫は聖を測ること莫く、未だ到らざれば即ち應に難かるべし。  
有學は却て無學にして、佛智は轉た深玄なり。  
無心の理を會せんと要せば、著すること莫くば心源を思む。

三世諸佛、

過去は實と言つに非ず、未來は眞と爲さず。  
現在は菩提子なり。法無きを玄門と號す。  
三身は同じく一に歸し、一性は遍くして身を含む。  
理に達せば三世に非ず、一法もて因無きを得。

依般若波羅蜜多故、得阿耨多羅三藐三菩提。

佛智は深くして測り難く、慧もて解するは廣くして邊り無し。  
無上の心は正遍にして、慈光は大千に滿つ。  
寂滅の心中に巧みに、萬餘の般を建立す。  
菩薩は多くの方便もて、普く救いて人天の爲とす。

故知般若波羅蜜多、是大神咒、是大明咒、

般若は神咒と爲りて、能く五蘊の疑いを除く。  
煩惱皆な斷盡せば、清淨自ずから分離す。  
四智の波は盡くること無く、八識は神威有り。

心燈明法界。即此是菩提。

は無上咒、

無上稱最勝。拔濟爲群迷。  
摩訶三界主。願廣起慈悲。  
能順衆生意。隨流引化迷。  
人人起彼岸。由我不由伊。

是無等等咒。

佛道成千聖。法力更無過。  
眞空滅諸有。示現化身多。  
來爲衆生苦。去爲世間魔。  
劫石皆歸盡。唯我在娑婆。

能除一切苦、眞實不虛。

佛願慈心廣。世世度衆生。  
弘法談眞理。普勸急修行。  
回心見實相。苦盡見無生。  
永息三惡道。坦蕩樂裏裏。

故說般若波羅蜜多咒、

故說眞如理。未悟速心回。

傳達摩撰『般若波羅蜜多心經頌』の譯注研究(程)

心燈もて法界を明らむれば、即ち此是れは菩提なり。

は無上咒、

「無上」は最勝と稱し、拔濟は群迷の爲にす。  
摩訶なる三界の主は、願いは廣くして慈悲を起す。  
能く衆生の意に順い、流れに隨いて迷えるを引化す。  
人々は彼岸に起つは、我に由りて伊に由らず。

是無等等咒。

佛道は千聖を成し、法力は更に過ぐるは無し。  
眞空は諸有を滅して、示現せば化身多し。  
來たる衆生の苦の爲、去くは世間の魔の爲なり。  
劫石皆な盡に歸するも、唯だ我は娑婆に在るのみ。

能除一切苦、眞實不虛。

佛の願いは慈心を廣くし、世世に衆生を度す。  
法を弘むるに眞理を談じて、普く勸めて修行を急がせしむ。  
心を回して實相を見、苦盡くれば無生を見る。  
永く三惡道を息めば、坦蕩として樂は裏裏たり。

故說般若波羅蜜多咒、

故に眞如の理を説かば、未だ悟らざるものも速かに心を回す。

六賊<sup>(4)</sup>十惡滅<sup>(5)</sup>。魔山合底摧。  
神呪除三毒<sup>(6)</sup>。心花五葉開。  
果熟根盤結<sup>(7)</sup>。步步見如來。

即說咒曰、羯諦羯諦、波羅羯諦、波羅僧羯諦、  
菩提薩婆訶。

羯諦本宗綱。扶機<sup>(8)</sup>建法幢。  
如來最尊勝。凡心莫等量。  
無邊無中際。無短亦無長。  
般若波羅蜜。萬代古今常。

摩訶般若波羅蜜多心經

六賊・十惡を滅せば、魔山は合底して摧す。  
神呪は三毒を除き、心の花は五葉に開く。  
果の熟して、根、盤結せば、歩々に如來を見る。

即說咒曰、羯諦羯諦、波羅羯諦、波羅僧羯諦、菩提薩婆訶。

「羯諦」は本より宗の綱なれば、機を扶けて法幢<sup>ほつちゆう</sup>を建つ。  
如來は最も尊勝にして、凡心は量を等しくすること莫し。  
邊も無く中際も無く、短も無く亦た長も無し。  
般若波羅蜜は、萬代・古今に常なり。

摩訶般若波羅蜜多心經



- (1) 不離線因針・・・二つのものが互いに頼りながら成り立つことを、線と針を用いて表したたとえ。『説苑』(紀元前六年頃)巻一に、孟嘗君の言葉として「線因針而入、不因針而急。嫁女因媒而成、不因媒而親」と記しており、また「開情偶奇・密針・」に、「編織有如縫衣、其初則以完全者剪碎、其後又以剪碎者湊成。剪碎易、湊成難。湊成之工、全在針線緊密、一節偶疏、全篇之破綻出矣。」(『文心雕龍』巻九附會)とある。
- (2) 六塵・・・六境のこと。六根による認識作用の対象である六つの境、すなわち色境、聲境、香境、味境、觸境、法境の六境のこと。六外處、六入ともいふ。
- (3) 禪門入正受、三昧任西東・・・『華嚴經』の偈文をソースとして、禪的立場で解釋したもの。『華嚴經』巻七、賢首菩薩品に、「或東方見入正受、或西方見三昧起、或西方見入正受、或東方見三昧起。」(T9 438b)とある。禪宗文獻では、まず淨覺撰『注般若波羅蜜多心經』に、「華嚴經」云、東方入正受、西方三昧起、西方入正受、東方三昧起、名爲自在也。」(拙論「淨覺撰『注般若波羅蜜多心經』の譯注研究」、駒澤大學禪研究所年報、第一七號、二〇〇六年、一九五頁)とあり、また『請二和上答禪策十道』にも、「第五問。索法『花嚴經』云、東方入正受、西方三昧起、正受三昧爲一爲異。」(田中良昭『敦煌禪宗文獻の研究』大東出版社、一九八一年、二六六頁)とある。
- (4) 六年求大道・・・釋尊の六年間の苦行のこと。
- (5) 四相・・・四有爲相のこと。すなわち、生まれること(生)、存在すること(住)、變わること(異)、なくなること(滅)の四つの相である。
- (6) 陰界六塵起・・・陰界は五陰、すなわち色・受・想・行・識を指し、これによって六塵の起こること。六塵は六境と同義で、色、聲、香、味、觸、法の六つの認識の対象を指す。本來清淨である心をけがしてしまつことから、塵といふ。
- (7) 蓮華出水・・・『妙法蓮華經』に由來するもの。吉藏の『法華論疏』巻上に、「十六、名妙法蓮華者、有二種義。何等二種。一者出水義、以不可盡、出離小乘泥濁水故。復有義如蓮華出泥水、喻諸賢聞、得人如來大衆中坐。如諸菩薩、坐蓮華上、聞說如來無上智慧清淨境界、得證如來深密藏故。・・・(下略)」とある。(T40 793c)
- (8) 無生・・・無生無滅の略。涅槃と同義。初期の禪思想を表す最も特徴的なキーワードの一つ。例えば、神會の『頓悟無生般若頌』があり、また慧忠撰『般若波羅蜜多心經注』に「了見本心、實無生處」(拙論「校注『般若心經慧忠注』」、駒澤大學禪研究所年報、第一六號、二〇〇四年、一八三頁)とある。
- (9) 遍計・・・法相・唯識にいう三性の一つである遍計所執性の略。三性(遍計所執、依他起、圓成實)とは、三種の存在の見方。遍計所執性とは、種々の縁によって生じた實體のない存在を實體と誤認し、執着する見方。
- (10) 不相干・・・推名本では「不相干」に作る。干は、極める、おかす、みだす、善い、うつくしいなどの意。「不相干」の誤寫か。「不相干」とは、互い關係しない、關係がないこと。『韓非子』巻八、第二七篇「用人」に、「明君使事不相干、故莫訟。使士不兼官、故伎長。使人不同功、故莫爭。」とある。

- (11) 心……椎名本では「眞」に作る。
- (12) 一般般……「一般」と同義で、同じであること。「一般般」とするのは、字數を揃えるためか。
- (13) 見性……本來清淨なる自性(=佛性)を見る、すなわちさとりを得ること。後の禪宗で「直指人心、見性成佛」と標榜されるように、成佛の同義語とされる。
- (14) 迥然……はるかなさま。『華嚴經』卷四三、十定品第二七之四に、「譬如須彌山王、以四寶峰、處於大海、迥然高出、而得其名」(T10 227c)とある。
- (15) 塵舍……毘盧遮那佛の略。毘盧遮那佛は究極の法身佛とされる。
- (16) 和光塵不染……『老子』に「和其光、同其塵」とあり、それは「和光同塵」と表現されて、光を和らげて俗塵に同することをいうが、ここでは、俗塵に同じつつ、しかもそれに染まらない意。
- (17) 能仁……佛のこと。サンスクリット語のSakya-muniの意譯で、釋尊の別名として用いられる。
- (18) 本來無一物……本來一物として、實なるもの無きこと。六祖慧能の悟道の偈の一句。興聖寺本『六祖壇經』に、「菩提本無樹、明鏡亦非台。本來無一物、何處有塵埃」(中川孝『六祖壇經』禪の語録4 筑摩書房、一九七九年、三六頁)とある。
- (19) 三光……日、月、星の三つの光のこと。
- (20) 四天……東、西、南、北の四方の天のこと。
- (21) 遮欄……遮は遮る、ははむ、欄はしきり、おりの意で、邪魔な障害物のこと。
- (22) 舌談諧……たわぶ戯れる。おど戯ける。『漢書』卷六五、東方朔傳第三五に「師古曰、『談、戲也。談笑、謂、譁、發言可笑也。談音恢、其下談嘲、談諧並同。』」とある。椎名本では「談談諧」に作る。
- (23) 依他性……法相・唯識にいう三性(遍計所執性・依他起性・圓成實性)の一つ。三性とは、三種の存在の見方。依他起性とは、あらゆる存在は縁によって起こったものであるとする見方。
- (24) 量裁……量り裁るという原意から、轉じて分別すること。ここでは、眼、耳、身、意の諸識によって分別するをいう。
- (25) 心王……心そのものをいう。心所を家來にたとえるのに對し、心を王と云う。
- (26) 遣回……押し進る、撥い除ける意。
- (27) 頓悟……段階なしにたちまちさとりを得ること。禪宗では、從來「南頓北漸」という言葉に示されるように、南宗に特有の思想と考えられていたが、敦煌文書に「頓悟眞宗修行達彼岸法門要訣」、「大乘開心顯性頓悟眞宗論」などの北宋系統の文獻が発見されたことにより、當時禪宗に共通した思想であることが明らかになった。
- (28) 頓教……頓悟の教えを指す。
- (29) 集……椎名本では「執」に作る。
- (30) 歡喜心離垢……善慧法中王……十地中の名前を列擧したもの。十地とは、『華嚴經』に説く菩薩の五十二の修行階位のうち、第四十一位から第五十位までの階位をいう。すなわち『華嚴經』卷二三、十地品には、十地を「何等爲十。一曰歡喜、二曰離垢、三曰明、四曰焰、五曰難勝、六曰現前、

七日遊行、八日不動、九日善慧、十日法雲、是十地者。」(T9 542c-543a)と説かれている。

(31) 三檀・…・「檀」は、聲聞、縁覺、菩薩の三乗のことか。檀は本來dana(檀那)の音寫で、布施のこと。なお、椎名本では「三檀」に作る。

(32) 煩悩・…・原意は鳥籠で、轉じて煩悩に束縛されることをいう。樊籠と同義。『廣弘明集』卷二九統歸篇第十上の無爲論には、「吾聞大人降跡、廣樹慈悲、破生死之樊籠、登涅槃之彼岸。闡三乘以誘物、去一相以歸眞。」(T52 343a)とある。

(33) 三身・…・法相・唯識で説く法身、報身、化身の三身のこと。法身とは、佛の宇宙身で、眞實そのもの。報身とは、佛になるための因としての行を積み、その報いとしての功德を具えた佛身そのもの。化身とは、佛が衆生を教化救済しようとする自化現した假のすがた。

(34) 八識・…・法相・唯識という眼・耳・鼻・舌・身の前五識と、第六の意識、第七の末那識、第八の阿賴耶識の八つの識をいう。

(35) 六通・…・神足通、天眼通、天耳通、他心通、宿命通、漏盡通の六種の神通力のこと。六神通ともいう。(1)神足通とは、自由に欲する所に現れる能力。(2)天眼通とは、自他の未來のあり方を知る能力。(3)天耳通とは、普通人の聞こえない音を聞く能力。(4)他心通とは、他人の考えを知る能力。(5)宿命通とは、自他の過去世のあり方を知る能力。(6)漏盡通とは、煩悩を取り去る能力。

(36) 身外眞眞佛・…・無爲果自同・…・身外に眞佛を求めることは、本末顛倒であり、むしろ靜に坐することを勧めた句。

傳達摩撰『般若波羅蜜多心經頌』の譯注研究(程)

淨覺の『注般若波羅蜜多心經』に、「捨生死外眞菩提、棄煩惱別求淨土、如逃形避影、轉益身疲、嫌跡遠藏、彌加脚倦。欲得住影、靜坐安身、欲得滅跡、無過息足也。」とある。(前掲拙論「淨覺撰『注般若波羅蜜多心經』の譯注研究」、二〇五頁。)

(37) 無心・…・何ものにも執らわれない、本來の佛心を指す。初期禪宗では、この語を冠した『無心論』があり、また後に大珠慧海の『頓悟要門論』では、これを慧能、神會の宣揚した無念の思想と結びつけられた。すなわち『頓悟要門論』に、「但知一切處無心、即是無念也。得無念時、自然解脫。」(平野宗淨『頓悟要門』禪の語録6 筑摩書房 一九七〇年、二四頁)とある。

(38) 玄門・…・幽玄なる妙門のこと。その語源は『老子』にある。すなわち『老子』の第一章に、「道、可道、非常道。名、可名、非常名。…・(中略)…・此兩者同出而異名、同謂之玄、玄之又玄、衆妙之門。」とある。後に佛教側に取り込まれていった。『廣弘明集』卷二〇、法義篇第四之三の「梁武帝涅槃經疏序」に、「佛性開其本有之源、涅槃明其歸極之宗。非因非果、不起不作。義高萬善、事絕百非。空空不能測其眞際、玄玄不能窮其妙門。自非德均平等心合無生、金襴玉室豈易入哉。」(T52 242c)とある。また禪宗燈史の『玄門聖旨集』のタイトルにも用いられ、佛教と道教の交渉を示す一つの重要な言葉として注目される。

(39) 四智・…・法相・唯識という大圓鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智の四つの智慧のこと。妙觀察智は、望むままに自由自在にはたらく智で、有漏の第六識を轉じて得たもので

ある。成所作智は、なすべきことを成し遂げる智で、有漏のうちにある眼・耳・鼻・舌・身の五識を轉じて得たものである。平等性智は、自他の平等性を體現する智で、有漏の第七末那識を轉じて得たものである。そして大圓鏡智は、大圓鏡にすべての像がそのまま映し出されるように、すべてのものをありのままに現し出す佛智で、第八阿賴耶識を轉じて得た清淨なる智である。

(40) 起……推名本では「超」に作る。

(41) 劫石……時間の久遠なること。『大智度論』卷五に「阿僧祇壽。菩薩義品中、已說劫壽。佛壽論說、四千里石山、有長壽人。百歲過持細軟衣一來拂拭。令是大石山盡、劫故未盡。」(T25 100c)とある。玄奘三藏の『請入少林寺翻譯表』に、「心迷意醉、窮劫石而靡怠、盡芥城而彌固。」とある。『全唐文新編』卷九〇六)唐の高宗皇帝の『三藏聖教後序』にも、「雖復法性空寂、隨感必通、眞乘深妙、無幽不聞。所謂大權御極、導法流而靡窮。能仁撫運、拂劫石而無盡。體均具相、不可思議。」(『全唐文新編』卷一五)とある。このほかに、唐代の佛教文獻でも、『神會塔銘』を初め、「劫石」の用例が數多く散見する。

(42) 坦蕩……こせつかず、心が平らかでゆつたりしているさま。

(43) 樂裏裏……樂しみのいっぱいなるさま。推名本では「樂裏裏」に作る。

(44) 六賊……煩惱を生ぜしめるものとなる眼・耳・鼻・舌・身・意の六根を賊にたとえたもの。淨覺の『注般若波羅蜜多心經』に、「如千年闇室裏、有瓊瑤七寶、人亦不知。有惡鬼六

賊、人亦不覺。燈光一照、闇盡而見長明」とある。(前掲拙論「淨覺撰『注般若波羅蜜多心經』の譯注研究」、一九六頁。)

(45) 十惡……十種の惡業のこと。それは殺生・偷盜(盗み)・邪淫・妄語(偏り)・綺語(ざれごと)・惡口・兩舌(二枚舌)・貪欲・瞋恚・愚癡の十種をいう。それは、身三・口四・意三に細分される。すなわち、十惡のうち初めの三つは身の惡、中の四つは口の惡、後の三つは意の惡である。

(46) 心花五葉開……達摩から五代を経て禪宗の教えの花が開く意。達摩の傳法偈に由來するもの。『寶林傳』卷八、達摩行教漢土章に、「吾本來茲土、傳教救迷情。一花開五葉、結果自然成。」(田中良昭『寶林傳譯注』内山書店、二〇〇三年、三七七頁)とある。

(47) 結……推名本では「獻」に作る。

(48) 建法幢……演法開暢して、大いに宗風を擧揚すること。法幢とは、説法する道場の門頭に立てられる幢幡のこと。